

C-7					
主題	コロナ禍における特別養護老人ホームの役割について				
副題	利用者、家族、ボランティアの社会参加につなげる				
キーワード 1	コロナ禍	キーワード 2	家族、ボランティ ア	研究(実践)期間	38ヶ月
法人名・事業所名	社福) 白十字会 特別養護老人ホーム白十字ホーム				
発表者(職種)	腹子雄太(相談員)				
共同研究(実践)者	なし				
電 話	042-392-1375	FAX	042-392-1255		
事業所紹介	白十字ホームは 1967 年に東京都内で 10 番目の特別養護老人ホームとして開設され、「トトロの森」のモデルとなった八国山の麓に建つ定員 170 人の従来型の施設です。併設の白十字病院、老人保健施設等と連携し、利用者の方が「安心、生き生き、こころ豊か」に生活できるような支援を目指しています。				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>令和 2 年 1 月下旬ごろより、新型コロナウイルスが急激な流行。令和 2 年 2 月 25 日から家族、ボランティアの面会を全面的に中止。当施設はウイルス流行前、毎日数多くのご家族、ボランティアが行き来する場であり、地域交流が盛んな施設だった。年間約 5000 人ほどのボランティアの受け入れを行い、様々な活動を実施していた。当施設のご利用者との活動にはいつも家族やボランティアの協力があつたが、全面中止によって、数多くの活動の実施が難しくなり、コロナの状況に対応した形での活動を模索する必要が生まれた。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>・コロナ禍によって機能しなくなった家族やボランティアとの関りについて、社会参加ができる取り組みを行い、ご家族、ボランティア、ご利用者それぞれが社会性を持った活動を行い、信頼関係を持つ。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>①対象者(ご家族、ボランティア) ②取り組みの具体的な手法(施設関係者との打ち合わせ、電話やプリントでの案内を通じた家族、ボランティアとの連絡調整) ③取り組み時間や期間(令和 2 年 4 月～令和 4 年 7 月現在) ④取り組みの手順(電話やプリント等でご案内し、協力を仰いだ。その後、この活動で得た反省やノウハウをもとにし、実施可能な活動の検討。行事活動やクラブ活動の順次開始。) ⑤取り組んだ職員数や構成(各相談員 5 名 行事委員会 10 名ほど グループ活動委員会 5 名その他職員多数。) ⑥部署間の連携 家族やボランティアの調整(相談員) 必要物品の受け渡し(総務課) 必要物品の準備(介護士、相談員) 会場レイアウト、飾り付け(介護士) ご家族、ボランティアへのお礼の手紙(相談員、介護士) ご利用者の写真撮影(介護士) ⑦使用した道具や費用は行事ごとによって多数。折り紙(菖蒲、ひまわり、朝顔、風車) 画用紙(サンタクロース帽子) 往復ハガキ(手紙、オンライン会議システム参加の有無確認) DVD(クリスマスコーラスの撮影) 等々。⑧活動の成果を出すポイントになった点</p>					

(物品を通じたボランティア活動をする中で、ご家族やボランティアの方と話す機会が増加。その結果、様々なご意見や、家族、ボランティアの抱えているニーズ、家族は施設内の様子がわかりにくい、ボランティアは活動場所が少なくなっているなどが見えてきた。その関りの結果、活動もより良いものになっていっているのではないか。) ⑨取り組みに対する施設のバックアップ体制 (wifi など必要機材の整備。必要人員の調整)

《4. 取り組みの結果》

令和 2 年 6 月 施設内菖蒲まつりの開始。(家族、ボランティア) 令和 2 年 8 月 夏祭り(家族、ボランティア、家族会、近隣の女子校) 令和 2 年 12 月 クリスマス (家族、ボランティア、近隣小学校、大学、関係のある女子校) 令和 3 年 4 月 停止していた活動がオンライン会議システムにて再開。(音楽クラブ 聖書の会 法話の会) 月 1 回。令和 3 年 9 月 敬老会 オンライン会議システム生配信(家族、ボランティア、社会福祉協議会、大学、女子校) 施設内の様子が分からないご家族の増加が課題(施設内の約 3 分の 1 の方がコロナ後の入所の方々に。) 令和 3 年 12 月 泉の会オンライン会議システム生配信 (紙芝居の音読)・窓越し音楽会 (関係のある女子校) 令和 4 年 4 月 行事委員会にご家族 OB が継続参加。

《5. 考察、まとめ》

関係性の継続のために、試行錯誤し、物作りを提案。呼びかけを行った結果、様々な形での協力や援助。コロナ禍での新しい活動の形づくりができた。ご家族とのかかわりについては、コロナ以前から面会に来られないご家族がいたが、物品の協力だけならと、直接施設に赴き活動の手伝ってくださった。また、敬老会で行われた、手紙の企画においては、直接親に感謝の気持ち等は言えない気持ちなどを手紙によって伝えられることが出来たり、今年度から家族会も行事の取り組みとして、積極的にご意見くださり、職員がなるべく負担の減らせるようにと、メッセージアプリのグループ機能を通じた情報網を充実したりと、積極的な関わりが増えてきた。コロナ禍によって、狭まったと思われた行事活動であったが、家族との関りについて幅が広がったように感じる。この取り組みはコロナ禍で取り組まれたことだが、コロナ終息後の直接面会に来れない方々との関係づくりの大きなヒントになり、アフターコロナに向けての形を見いだせた。また、始めは特定の家族やボランティアとの交流だけであったが、活動を続けているうちに、ボランティアの伝手で、社会福祉協議会の福祉協力員とのつながりが見いだされたり、DVD を通じた活動の提案があったりと、一方通行だったやり取りから、双方向のやり取りができるようになっていったことも、この取り組みをして意味があったと思える。白十字ホームという施設の地域での役割が改めて確認できた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

《8. 提案と発信》

利用者の安心した生活につなげるため、日々のレクリエーション活動はとても重要なものである。施設の現状とすると、コロナウイルスによって施設内の 3 大介護で手一杯の部分があったが、ご家族やボランティアとのつながりがあることによって、行事などの活動は支えられているのだと感じることができた。しかしながら、今現在も活動再開が難しい活動が多く、ボランティアの方々の高齢化、コロナで引きこもりがちになっているボランティアの方々の活動場所が少ないといった現状がみられる。また、日常的に行えている施設利用者の活動は以前よりも少ない。また、今後もアフターコロナに向けた視点を持ちご家族、ボランティアとの交流や活動を今以上に考えていきたい。